戸田　隆夫

逆説の経済社会発展を遂げようとする国の闇と光

二〇〇九年一〇月七日午前一一時、青年海外協力隊のＩＴ隊員である庄子と小沼は、オスマン科学技術大臣（いずれも当時）のオフィスにいた。庄子は、バングラデシュのＩＴ産業発展のために、アジア共通の制度となろうとしている情報処理技術者試験の導入の必要性を大臣に説き、小沼は、ＩＴ戦略のビジョンをベンガル語の詩で表現した。五年経った今、バングラデシュはアジアで七番目の国として情報処理技術者試験を正式に取り入れ、国策としてのＩＴ人材育成を本格化させようとしている。

一国の経済や社会が急激な変化を遂げるときには、その予兆があるが、それを跡付けではなく予兆として同定することは容易なことではない。その後の変化の軌跡を正確に予見することは、さらに難しくほぼ不可能に近い。明治維新後の日本、南巡講話以降の中国、ドイモイ後のベトナム、一九八〇年代後半以降のタイ等々、多くの場合、いずれもアカデミアがなしえたことは、変化のマグニチュードとスピードが衆目にも明らかになった段階において、その構造を事後的に説明することに留まっている。

バングラデシュは、今、そのような予見困難な物語の序章に在る。三度の「分離・独立」のプロセスで引き裂かれた国内の社会関係資本、近隣国との人的紐帯と信頼関係、徹底的に収奪され換骨奪胎された国家経済、四散した産業資本と人材、貧しく教育程度の低い人々がひしめき合う世界一稠密な国土、世界で最も自然災害に脆弱で、かつ氾濫する河川によって分断された国土、隣国の大国に三方を囲まれた地政学的位置等々、枚挙にいとまがないハンディを乗り越え、あるいは、それらを逆手にとって、「離陸」に向けて堅調な成長を遂げようとしている。バングラデシュは、（おそらく資源の罠を巡るディスコースをほぼ唯一の例外として）私たちが慣れ親しんできた開発経済学の定石に悉く背馳し、堂々と、逆説の経済社会発展を遂げる国であり、近現代史を通じ大変珍しい存在となりつつある。それゆえに、そこから人類社会が獲得すべき知見も潤沢にあるはずだ。その反面、その豊饒な土壌を解明するためにアカデミアの知的エネルギーが十分に投入されているとは、到底いいがたい状況にある。

タゴールは、「光と闇は、（交互に訪れるのではなく）同時に存在する」という趣旨の言葉を残している。アカデミアの義務は、この逆説の物語の主人公であるバングラデシュが苛まれている深甚な闇の意味を噛みしめつつ、同時に、その闇の深さゆえに灯り輝く希望の光の可能性について、私たちの認識に彫琢を加えることであろう。

とだ　たかお／国際協力機構人間開発部長

京大法学部、東大大学院新領域創成科学研究科修士課程、名大大学院国際開発研究科博士課程を経て、学術博士。平和構築支援室長、人間の安全保障グループ長、バングラデシュ事務所長等を経て現職。